

結果から言うと、それはギャグでも笑いどころでもなかった。スズミヤ・ハルヒは、いつだろうがどこだろうが冗談などとは言わない。

常に大マジなのだ。

のちに身をもってそのことを知った俺が言うんだから間違いはない。

沈黙のようせいが三十秒ほど教室を飛び回り、やがて体育のセンスのオカベIIサンがためらいがちに次の生徒を指名して、白くなっていったアトモスフィアはようやくやく正常化した。

こうして俺たちは出会っちゃまった。

しみじみと思う。偶然だと信じたい、と。



◆第一部 チェアウーマン・アサシネイテッド・ストーリーテラー ぶい

「キョンIIサンは今朝がタバコに入っていた」「放課後に誰もいなくなったら一年五組の教室に来てね」というオリガミ・メールに従い、一年五組の教室にやってきた。もしかしてカチグミか？ とニヤけるキョンIIサンは実際キモかった」

誰がそこにいようと驚くことはなかったろうが、実際にそこにいた人物を目にして俺はかなり意表をつかれた。まるで予想だにしなかった奴がブラックボードの前に立っていたからだ。

「遅いよ」

アサクラ・リョーコ||サンが俺に笑いかけていた。

「ドーマ、アサクラ||サン」

「ドーマ、キヨン||サン」

くったくなく笑うアサクラ||サン。その右半身が夕日でマグロの赤身めいた色に染まっていた。

「何の用だ」

わざとぶっきらぼうに訊く。くっくつと笑い声を立てながらアサクラ||サンは、
「用があることは確かなんだけどね。ちよつと訊きたいことがあるの」

俺の真正面にアサクラ||サンのゲイシャばりの白い顔があった。

「人間はさあ、よく『やらなくて後悔するよりも、やって後悔した方がいい』って言うよね。これ、どう思う？」

何故ここで平安時代の剣豪、ミヤモト・マサシの名言を出したのか。いや、ミヤモト・マサシの名言ではなかったかも知れない……。

「よく言うかどうかは知らないが、言葉通りの意味だろうよ」

「じゃあさあ、たとえ話なんだけど、現状を維持するままではジリー・プアー（ジリ貧と思われる）になることは解ってるんだけど、どうすれば良い方向に向かうことが出来るのか解らないとき。あなたならどうする？」

「なんだそりゃ、ネオサイタマの経済の話か？」

俺の質問返しをアサクラⅡサンは変わらない笑顔で無視した。

「とりあえず何でもいいから変えてみようと思うんじゃない？ どうせ今のままでは何も変わらないんだし」

「まあ、そういうこともあるかもしれない」

「でしよう？」

手を後ろで組んで、アサクラⅡサンは身体をわずかに傾けた。

「でもね、上の方にいる人は頭のう指数が低くて、急な変化にはついていけないの。でも現場はそうもしてられない。手をつかねていたらどんどん良くないことになりそうだから。」

「だったらもう現場の独断で強硬に変革を進めちゃってもいいわよね？」

何を言おうとしてるんだ？ ドッキリか？ 俺はロッカーでもタニグチⅡサンが隠れているんじゃないかと思って教室を見渡した。隠れやすそうな所は、あとは教卓の中とかか。

「何も変化しない観察対象に、あたしはもう飽き飽きしてるのね。だから……」

キヨロキヨロするのに気を取られて、俺はあやうくアサクラⅡサンの言うことを聞き漏らすところだった。

「あなたを殺してスズミヤ・ハルヒⅡサンの出方を見る」

惚けているヒマはなかった。後ろ手に隠されていたアサクラⅡサンの右手が一閃、さっきまで俺の首があつた空間を鈍い金属光が難いだ。

ネコを膝に抱いて背中を撫でているような笑顔で、アサクラⅡサンは右手のカタナブレードツルギを振りかざした。その武器はどう見てもニンジャの得物そのものなのだ！

「アイエエエ！ ニンジャ！？ ニンジャナンデ！？ アサクラⅡサンはニンジャなのか！？」

「あたしはアサクラⅡサンではない。マUGE・ニンジャです」

俺が最初の一撃をかわせたのはほとんど僥倖だ。その証拠に俺は無様に尻餅をついて、しかもあまりの驚きで失禁してアサクラⅡサンの姿を見上げていた。